

論

説

筋疾患の難病・先天性ミオパチーを患う市川沙央さん(43)の「ハンチバック」が第169回芥川賞に選ばれた。重度障害者の受賞は初めてだ。

背骨がS字に湾曲し「せむし(ハンチバック)の怪物」と自ら呼ぶ。人工呼吸器と痰の吸引器と電動車いすに頼り、あおむけに寝て、手のひらサイズのタブ



宮武剛

芥川賞「ハンチバック」

レット端末に触れて書く。受賞作は、さまざまな性的嗜好客らが突発的なセックスを楽しむ「ハブバ(ハくれたグループホームに暮る。プニングバー)」で始まる。

その乱痴気騒ぎを載せる投稿サイトのR18小説(18歳未満禁止)、T1小説(ティーンズラブ、女性向)

「活字の世界」が広がる。主人公は作者を投影した重度障害者で、親が建ててくれたグループホームに暮らして、コタツ記事を作って原稿料は寄付する。

使い切れない財産を持つが、訪問者はヘルパーと訪問医とケアマネジャーと呼ぶ。米国の大学では電子

ちの無知な傲慢さを憎んでいた」。

市川さんは、早稲田大の通信教育課程に学び、卒論も書き上げた。活字を愛しながら活字を憎む痛烈な告白に、私たちはどう応えればよいのか。

作中にも回答例の一つは「ある。米国の大学では電子出版はよいのか。その小切手をヘルパーは受け取るかどうか……」。

障害者の告白と告発

け官能ライトノベル)、取材はしないでネット上の情報をつぎはぎする「コタツ記事」、閲覧回数を増やす「PV(ページビュー)稼

ぎ」〜年配世代には未知の

分厚い本を両手で押さえ没頭する読書は「背骨に負担をかける。私は何よりも紙の本を憎んでいた」。

目が見えること、本が持てること、ページがめくれること、読書姿勢が保てること、書店へ自由に買いに行けること。その「特権性

教科書は「箱から出して視覚障害者がすぐ使える仕様の端末でなければ配布物として採用されない」。

著書ハンチバックと著者、市川さんの告白は恐ろしいほど赤裸々で、それゆえ衝撃の告発となつて社会を撃つのだろう。

みやたけ・ごう NPO法人福祉フォーラム・ジャパン副会長、学校法人・社会医学技術学院顧問

育兒も無理。だが、「子どもに気付かない『本好き』た

出産には耐えられない。

を撃つのだろう。(本紙論説委員)